The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	【講演録】バザーリアのアッセンブレアから哲学実践へ
Author(s)	Di Grazia, Alessandro
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 135-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第16回臨床哲学フォーラム
テーマ：イタリアの精神保健と哲学実践

講演録：バザーリアのアッセンブレアから哲学実践へ

アレッサンドロ・ディ・グラツィア

みなさま、本日はこのような場所にお招きいただき、誠に有難うございます。まず、このようなかたちでこの場にお招きただきましたことを、西村先生はじめ、近田先生、フラヴィアさん、そして、ずっと通訳として帯同してくださっている小泉さんや六郷さんらの日本の友人たちにお礼を申し上げたいと思います。そして、先ほど動画配信で登場していた、イタリアにいる小村絹恵さんにもお礼を申し上げなければなりません。彼女が橋渡しをしてくれたからこそ、こうしてトリエステと大阪がつながったわけです。このようなかたちで招待、また歓待していただいたということもあってか、じつはいまとても緊張しています。おそらくそれは、今日お越しくださっている皆さんのご期待に応えなければいけないと考えているからなのだと思いますが、だからこそこの素晴らしいおもてしなに対して、みなさんの期待に応える贈り物のようなものをお持ち帰りいただきたいと考えています。

おもてなしという言葉で思い出しましたが、古代ギリシャでは特有のもてなしの作法がありました。ギリシャでは、客人が訪れると、その客人により多くの贈り物を捧げるという高度化されたコミュニケーションの習慣があり、そして同じようなことが、いま、多くの移民が押し寄せつつあるイタリアにおいても生じつつあります。このようなとき、すなわち別の場所から他者・客人が来たというときにどうすればよいのかを考えたとき、やはりその客人を尊重し、手厚くもてなし、彼らにより多くの贈り物を捧げる、贈り物でその客人を覆い尽くすぐらいのもてなしをすると、最終的に彼らが(気持ちよく)帰路に着く、というようにギリシャでは考えていたわけです。そして、そうすることによって、帰国後、もてなしを受けた客人たちは、旅先でどのような歓待を受けたのかを母国でさらに話すようになるということがあります。

さて、本日みなさんの前でわたしが準備した話をはじめる前に、ちょっと言及しておきたいことがあります。あまり大きく話を変えると通訳の方がお困りになるかもしれないのでなるべくあらかじめ用意したテキストに沿って話を進めたいと思うのですが、昨日、わたしは広島のほうにまいりました。原爆跡地を訪れ、とても心を揺れ動かされると同時に、ものすごく考えさせられました。あのような悲惨な出来事が起きた広島、日本において、みなさんが、そして、日本がどのような傷を負ったのかということを考えました。そして、それが、歴史というものにどう関わっているのか、さらには悲劇について考えたわけです。そして今日、これからわたしはその悲劇ということに関して、フランコ・バザーリア(Franco Basaglia, 1924-1980)という人物をとおしてイタリアの精神保健領域の文脈からお話していきたいと考えています。

バザーリアは、悲劇を経験しています。また彼は、戦争を経験してもいる。当時、パルチザンの活動に関わっていたということもあり、逮捕されていた時期もあった。そして彼は、戦争の後に精神医療の改革というものに取り組みはじめる。彼はその改革のさなかにさまざまな著書を残しているのですが、どれもこれも非常に難しい。彼が改革を行ったイタリアに住んでいるわたしたちが読んでもそれは難しい。ですので、彼の思想の輪郭やその本質をここでみなさんにお話しするということはとてつもなく困難な作業のように思われます。

バザーリアは、自身の改革のなかで、〈狂気〉というものを捉え返す作業に着手します。具体的には収容施設というものを、すなわち精神病院と呼ばれているもの(制度)を破壊することを一番に試みます。わたし自身は、この試みの背景には第二次世界大戦の影響が非常に色濃く反映されている、と考えています。当時、たとえば1968年頃のヨーロッパでは反権威主義と言えばよいのでしょうか、いわゆる権威に対して抵抗する、そういった大きなうねりのようなものがありました。そういった風が吹いていたんですね。これは、権威の話でもあり法の話でもあるのですが、この権威や法というものは非常に強烈で、ときに残酷な力を発揮します。そして、こういった権威の残酷さこそが、多くの人々が死亡することになるあの第二次世界大戦を生じさせることになったわけです。ですので、こういった権威によって生じてきた戦争というものがあったという事実、背景を踏まえたなかでバザーリアの改革を読み解いていかないと、そこで彼が何をしたかったのか、何を思っていたのかということがなかなか理解できない。まずは、みなさんにそのことをあらかじめ知っておいていただきたいと思います。そして、このような歴史的な背景がったからこそ、彼がイタリアにおいて精神病院を全廃することができたということも、ここで言い添えておきたいと思います。またこれはイタリアだけではなく、欧州全体での流れだったとみなさん考えておいてください。

そしてここから、今回の講演の中心でもあるバザーリア精神医療改革において重要な役割を担っていたアッセンブレア(集会)の話に入っていきたいと思います。このアッセンブレアとは、ゴリツィア（イタリア共和国北東部のフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州にある都市）における実験的な試みとも言えますが、このような改革運動が興るなかでまず何が問題かというと、非常に強力なヒラルキーが社会のうちに存在していた、ということです。そこで、バザーリアが目指したのは社会のうちにあるこのヒラルキーを打ち崩し、いわゆる水平性を軸にした社会構成へとそれを編みなおそうとしたことです。そして、アッセンブレアといわれる、いままでなかった（水平的で対等な関係を軸にした）ミーティング手法のなかで、先に触れたような水平性を軸にした社会構成への転換のためのエクササイズがなされていった、というわけです。

ところで、こういった試みは、じつは哲学の実践に非常に似ているとわたしは考えています。その哲学的な実践ですけが、じっさいのところ何をするかというと、簡単に言うとそこに集うすべての者に言葉を発する機会と場を与える、ということです。みんなが発言できる、自分の考え、意見が言える。そういった場を、機会を設けていくということになります。こう言ってしまうと、それは普通のことじゃないかと思わ

れるかもしれませんが、わたしたちにとってそれは非常に大きな勝利だったのです。というのも、権威というものはそもそも中央集権的ですので、こういった対等なかたちで自由に自分の意見や考えを述べることができるという水平性をそれはそもそも許さないものだからです。

ここで、フランスの思想家ミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-1984）の言葉を引用したいのですが、フーコーは「批判的思考というものは権力に対する大きな、非常に有益な抵抗のツールになり得る」というようなことを言っています。これは非常に重要な考察だとわたしは考えています。これは、権威を捉える際のベースになる考え方ではないでしょうか。そして、今日のわたしたちの状況はどうなっているのかというと、わたしたちは見えない檻(権力)、しかも広範囲にわたる檻に入れられているように思われます。

それについて考えてみるために、まず、わたしたちが現在どんな状況にあるのかを知る必要があります。今回の講演にあたり、小村絹恵さんはじめ、さまざまなかたがたのお力をお借りして日本の精神医療の現状について少し勉強をしました。そういった日本の状況を踏まえたうえで、バザーリアの実践およびその背景にある思想というものが、いかなるかたちでなら日本の精神医療のコンテクストのなかで生かすことができるかについて少し考えてみたいと思います。

まず、バザーリアのゴリツィア時代の話から進めていきたいと思います。彼にとってゴリツィアの時期というと、後に紹介するアッセンブレアを中心に改革が進められていた時代になります。当時のゴリツィアでは地域精神医療保健に関わるサービスやシステムの問題など、非常に複雑で難しい問題が山積しており、先ほどの小村さんのお話にもあったと思うのですが、こういった問題を乗り越えていくためには、やはりこのような問題に対する社会的な信念や感受性をもつことが非常に重要になってくるということがあります。

小村さんのほうから、イタリアにおける精神医療保健改革の背景にどのような問題があるのかについて説明があったと思いますのでそれについてはここでは触れませんが、初期のゴリツィア時代のバザーリアの行っていた精神医療、精神保健改革は、いわゆる治療共同体といったものにかなり似ていた、ということがあります。

バザーリアがゴリツィアの精神病院に招かれたのは1961年のことでした。そして、そこでどのような状況を目の当たりにしたかというと、もはや（患者の）人権が完全に剝奪されているような、まるでナチスの収容所に患者たちがいるような、そういった状況を目の当たりにしたわけです。バザーリアはゴリツィア時代に、何よりもこの悲惨な状況に対して激しい批判を行う。ちなみに、この状況をラーゲル、すなわちナチスの収容所と精神病院を同じようなものだと喩えたことで、当時、プリーモ・レーヴィ（Primo Levi, 1919-1987）との大きな論争が勃発したというような記事が残っていたりもします。筆舌に尽くしがたい悲惨な状況を経験にしたことが出発点となって、バザーリアのさまざまな精神医療保健改革なされていくわけです。鉄格子に囲まれた四角い箱のような医務室の中に、暴れる患者が落ち着くまでそのまま放置され続ける。そういったことが普通に行われていたわけです。そして、この状況を見てバザーリア

は、患者たちに上から目線で関わっていくような権威的な態度を徹底して戒め、むしろこの過酷な状況に置かれている患者たちと同じような状況のなかに自らを投げ入れ、それこそ、彼らと地べたで一緒になるところから改革を始めていく。彼のこのような行為は、ときに、イタリアの精神医療の歴史のなかでは神話のように語られたりすることもありますが、それはまったくの誤りです。現実離れしていると思われるかもしれませんが、これは、じっさいに彼が行なった事実に他なりません。彼は同僚も巻き込み、まさにその現場の只中に入り込み、汚物で汚れ、鼻をつくような匂いを自身の目と耳と鼻とで感じとってこそ改革が始まるといった戦略をたてたわけです。そして、これまで虐げられてきた患者たちと同じ目線に立つという構えをとおして、はじめて、バザーリアが改革の中心に据え付けたアッセンブレア（集会）という試み ── 医師や看護師などの医療従事者や管理運営に従事する事務職、そして患者らが一堂に会し、自分たちが抱えているさまざまな問題や病院施設における課題について対等な立ち位置に立って徹底的に話し合うという試み ── が可能となる土壌が整えられたと言えます。アッセンブレアのなかでいろいろな問題が起きたり、反論が出たりとか議論が出てくるわけですが、それらについてまさに患者たちが中心となって個々人の意見を述べあい、語りあう、ある意味ソクラテス的な集会（対話）というものが始まるわけです。先ほども言いましたが、これは、彼らにとっては単なる集会といった意味にとどまるものではありません。そのことを伝えるために、ここで、当時、アッセンブレアに参加していたルッキ（Lucchi）という名前の男性患者とバザーリアとのあいだで交わされたやりとりを少し紹介しておきたいと思います。彼は、アッセンブレアにおける一連の話し合いが行われた後に、そこに参加していた者たちに向けて（とくにバザーリアに向けて）こう言います。「ほら、数年前までわたしたちはみんな死んでいたんですよ。それが今やこうして自分の意見を述べ、またそれを聞き取ってもらうことができてみんな満足しています。幸せです。一体誰が、こんなふうにしてくれたのでしょうか」。これに対してバザーリアは、普通だったら「感謝してくれてありがとう」とお礼を言うようなところですが、彼はそうは言わず、つぎのような意味深な言葉をルッキに、またそこにいるみんなに向けて言ったのです。「わたしたちにはまだまだ大きな問題残っているのだけれど、でも今や君たちは、（言葉のやりとりをとおした）お互いのお世話、すなわちケアで忙しくしているよね」というふうに。これは、アッセンブレアのうちにいわゆるケア関係の成立を読み取っている点で極めて重要な指摘だと思います。

さらにこのことに関連して言えば、このアッセンブレアは、少なくとも非常に大きな二つのものを生み出したと言えます。一つ目は、哲学的実践に関わるものです。アッセンブレアにおける話し合いを通じて、その背後に隠されている根本的な問題をあぶり出し、またそれらに対する各々の思いや考えを率直に言葉に出すことによって、それぞれが自分とは異なるさまざまな考えに触れ、さらにそこで共有されたものから新たな考えを練り上げていく。アッセンブレアでの話し合いはいわゆる病気を治すといった治療的なものではなく、ケア、すなわちおたがいの世話をし合うということ（相互依存的・相互補完的なあり方）に深く関わる営みに他なりません。じつは、これは先

ほどフラヴィアさんがイタリアの精神医療のあり方を哲学的な対話実践のアプローチに絡めてお話しになって際にも触れておられた、対話をとおしてたがいにケアし合うこと、すなわち対話という営みのなかでたがいの世話をし合うことによって幸福が生まれてくることを準備するという、哲学的な実践（哲学プラクティス）の考え方とつながってくるものです。

それからもう一つ、これは先ほどのケアの問題にも関連するもので、非常に難しいことではあるのですが、アウトリタ（autorità）、すなわち権威に関わるものです。権威の問題については、さきほど、バザーリアが精神保健改革における取っ掛かりとして、自分の医師としての権威的な立ち位置を正直に見据えながらも、あえてその立ち位置から距離をとり、具体的に言えば自分も患者と同じ地べたに座り、汚いまま留め置かれてきた場に入ることを重要視していたとお話ししました。

医師という権威を認めながらもその権威から降りていく。ここにはある種の矛盾のようなものがみてとれますが、バザーリアは、あえてこの権威から自分が降りていくことによって、みんなが対等な関係性のもとで意見を述べ合い、さまざまな思いを共有していけるような場を拓き、まさにその場で互いにリハビリをしあっていく関係性を目指したのです。それは、大袈裟な言い方で言えば自由主義、すなわち自由な空気の中でそれぞれが互いにケアをし合いながらリハビリをしていく、という試みと言えます。権威を持ちつつも権威を拒む。とはいえ、たしかにバザーリアは、このケア的な場を準備し、対等な立場でそれぞれの意見を述べ合うことを可能にしたという意味においては、彼は、あきらかに上に立つもの、すなわち権威的な存在であると見なすこともできます。もちろん、バザーリア自身もそのことを十分心得ていたからこそ、その立場を利用しつつ、他方でその権威を拒んで患者達と同じ場所に入り込み、その場に参加するみんなを「主人公になること（protagonista）」を可能にする[1]、ある種の矛盾のなかを生きたと言えます。（やはり、対等な場をつくり出すためには、その取っ掛かりにはある種の権威的な力を必要とする、という矛盾を率直に認めなければなりません。）

アッセンブレアに限らず、このような哲学的な対話の場はイタリアでは結構行われています。日本のなかでこの種の対話がどれだけ行われているのか詳しくは知りませんが、権威的な関係性から距離をとる対話という営みをとおしてこそ可能となる相互のケア的な関わりのなかで、そこに集う者それぞれが〈変化〉していく、ということ

[1] バザーリアが行った改革は、当時の精神科病院による〈監視〉を軸にした「人間をモノ化」して捉える〈精神医学/精神医療(psichiatria)〉のあり方から距離をとり、「治療共同体」と呼ばれる集団精神療法をベースにした集団討論の場(アッセンブレア assemblea)を精神科病院内に積極的に導入する。アッセンブレアを軸に、患者本人が自らの苦しみを「精神医学の専門家」たちに完全に委ねてしまう〈精神医療〉および〈精神病院〉の弊害から、他者との対話をとおして、まさに自身の抱える苦しみや困難に対して自分自身がその「主人公であること(protagonismo)」を自覚しつつ臨んでいけるような〈精神保健(salute mentale)〉の可能性が拓かれていく。イタリアの〈精神医療〉の変革の歩みに同伴してきた哲学者のピエル・アルド・ロヴァッティ (Pier Aldo Rovatti)は、彼のこのような道筋を、当事者本人の「主体性を取り戻す(Restituire la soggetività)」動きと表現してもいる。

です。この〈変化〉がなぜ対話の場で生じてくるのかについてはわたし自身もあまり詳しくは論じられませんが、この〈変化〉、哲学用語では〈変容（trasformazione)〉とでも言うのでしょうか、(物事の前提それ自体を遡行的に問い直す哲学的な）対話を通じて、根本的な諸問題についてともに考えていくなかで相互にケアし合う関係が生まれ、その過程のなかで各々が変化(自己変容)を成し遂げていくことになる。そういった機会を可能にするという意味において、この哲学的な対話という営みは精神医療保健の現場においてもきわめて意義のあるものとなってきたのだと思います。

たとえば、精神医療保健領域における哲学的な対話を行おうとする際に設定されうるテーマの一例として、「〈狂気〉とは何か」を挙げることができます。このテーマは簡単であるようにみえてじつは複雑で、なおかつその奥底に根本的な問題を抱え込むきわめて厄介なテーマと言えます。というのも、そもそも「〈狂気〉とは何か」という問いかけに対して、その諸問題を専門的に扱う精神医療の専門職者やそこに関わる関係者でさえその答えはまちまちで、個々の解釈のもとで不明瞭なままに留め置かれ続けているものだからです。だからこそ、それぞれの解釈や意見を対話という営みをとおして違いをつけつつ、一方で丁寧に撚りあわせながら共通の考えへと高め合う機会と場が必要なのです。対話という契機を通じてこそ、他者の意見を経由して自分自身の考えをいっそう逞しくしていくことができると思われます。

さらに、誤解を避けるためにあらかじめ触れておくと、ここでいう哲学的な対話は複数人による集団で行われるものであって、いわゆる１対１で行われるコンサルタントや治療を目的としたカウンセリングとは異なるものとして捉えておくべきだ、ということです。とくに哲学的な対話は、自身が抱える問題に対して専門的な知識に基づいた回答を与えてもらうことを期待して出向いていくコンサルティングにおけるそれとは決定的に異なるものです。わたしたちは、ふつう、専門的な知識を得られ、問題に対する的確なアドバイスが（専門家から一方的に）与えられることを期待してコンサルティングへと出向いていくのではないでしょうか。しかし、哲学対話は、すでに述べたような、参加者間でのケア的な関係性を拓く可能性が見込めるとしても、それは、いわゆる治療を目的として行われるようなものでもありません。

そもそも、哲学的な対話の場は専門家や患者といった一方向的な関係性のもとで行われるものではなく、それは、それぞれが対等な立ち位置のものとで行われる(複数人による)営みであるため、最初からさまざまな対立する意見や考えが出てくることは織り込み済みです。もしこれが、専門的なやり取りが一方向的になされるコンサルティングやカウンセリングのような１対１の関係だとすると、そもそもそこに何ら意見や対立する考えなど出てこないのではないでしょうか。もちろん、コンサルタントやカウンセリングのような一方向的な関係性のもとでは、専門家が自分自身の思い悩みなどをいろいろ聞いてくれて、それをとおしてある種の安心を得るということもあるでしょう。しかしながら、さまざまな状況に置かれた者が集う複数人による対話の場ですと、それぞれに異なった立ち位置や考え方の人間がそこに居合わせ、また各々がいろいろな考えや意見、主張を述べるので、必ずしも自分の言っていることが相手に聞いてもらえる、理解してもらえる、あるいはその考えに対して何らかの答えやアドバ

イスを提示してもらえる、という約束がなされるわけではありません。しかし、そのような対等性に基づいた対話の場だからこそ、相互におけるケア、さらには自己へのケアということが可能になっていくのだとわたしは考えています。

これについては先ほどのご発表のなかでフラヴィアさんも少し触れておられましたが、対話という営みは、自分の内面に深く分け入り、探り、あらためて自分というもの知る、そして、そこからさらに、自分が自分自身に対して抱いている自己イメージと他者から投げかけられる自分に対するイメージとを丁寧に問い直し、修正していく契機となり、最終的に自己に対するケアへとつながっていくことを支えるものなのではないでしょうか。自己へのケアは、単に自分というものの内面性を探求することだけで可能になるものではありません。バザーリアも言っているように、もしかしたら自分というものはみんなが思っているような人間ではないかもしれないし、逆に、みんなが思っているとおりの人間なのかもしれない。他人に見せているその姿、それが真実なのか、あるいは、そうでないのか、そこのところは分からない。だからこそ、積極的に他者の前に自分を晒し、それを互いに修正しあう場として機能する対話という場こそが、自己というものに対するケアの可能性を拓くものとなりうるのだろうと思います。だからこそ、哲学的な対話を通して可能となるこのようなケアの場をいっそう機能させるためにも、その舵取りを任されている哲学プラクティショナーの役割はきわめて重要なものとなってくると言えるでしょう。

一般的に対話という営みはディスクール、すなわち言説のやり取りを弁証法的なやり方でおこなう西洋的な試みと言えるものなのかもしれませんが、バザーリアはむしろ言説の手前にある沈黙、静寂といったレベルで結ばれている関係性に非常に気を配っていた人でもありました。たとえば、先ほどアッセンブレアでのルッキさんの発言――「数年前までわたしたちはみんな死んでいたんですよ。それが今や、こうして自分の意見を述べ、またそれを聞き取ってもらうことができてみんな満足しています。幸せです」――を紹介しましたが、じつは、ここにこそ非常に重要なポイントが隠されているといえます。なぜなら、ここには、各々の言説、発言のやり取りを可能にする他者との信頼関係が事前に共有されているからです。もちろん、この信頼、他者を信じる（他者から信頼される）という関係性それ自体が哲学的なテーマでもありますし、またこれこそが哲学対話を可能にする、きわめて重要な下地になっているものとも言えます。バザーリアは権威の性格を熟知したうえで患者と同じ視点にまで降りてゆき、患者たちの話を丁寧に聴くなかで、対等な間柄、信頼関係をともに築き上げ、最終的に患者たちはそのなかで自分自身の生というものを再び自らのうちに奪還することができた、ということです。そして、この他者を信頼する／他者から信頼されるという関係に関してですが、これは非常に難しいテーマですので、今から少しわたしの個人的な経験をお話ししたいと思います。みなさんが今日ここにいらっしゃるのは、わたしの個人的な経験をお聞きになりたいからだと思いますので、ぜひ話をさせてください。

何年か前に、わたしは友人たちと一緒にビブリオテーカ・ディッフーザ（biblioteca diffusa）というプロジクトを立ち上げました。これを日本語で何と訳すのか分かりませんが、広範囲に広がる図書館といった感じなのでしょうか。要するに街中のいろい

ろな所に図書館のような、本が自由に読めるような場所を設けるというプロジェクトです。トリエステは小さい街なので、実際にはそんなプロジェクトが必要なのかという迷いもありましたが、試してみました。その際、精神疾患を抱える20名くらいの患者をスタッフとして育成するというコースを設けました。このときには、地域精神保健サービスの職員の支援も、精神科医の介入もありつつといったかたちで彼らに就労経験をさせ、かつ治療も行った。また同時に、並行していろいろなコースやレクチャーもやりはじめました。ある意味これは職業訓練的なものにもなったわけですが、その訓練の中で患者たちは技術的なことも学んでいったのです。たとえば図書館の仕事なのでカタログを作ったりとか、本棚の整理をしたりとか、本に触れつつそういったことをみんなやっていった。そして、その結果何が起こったかというと、最終的にそれが彼らの文化的なリハビリにもつながって、非常に大きな成果を生み出したのです。その後、わたしたちは友人たちの間でその効果について話し合いの機会を何度ももちました。ちなみに、そのなかでわたしたちがともに実感したのが、このプロジェクトのなかで、対等な関係性のもとで他者の声や思いに触れ、考えを傾聴するということ、人の話をしっかりと丁寧に聴くという営みそれ自体が当事者にとってはリハビリ、あるいはリカバリーにつながっていく、ということです。この聴く、傾聴するという地道な実践がどれだけ大切なことかということにわたしたちはあらためて気づかされました。ここであえて〈狂気〉の話に戻りますが、こういった患者たちを多くの人は往々にして自分たちとは全く異なった人間だと考えがちです。しかし、じっさいにはわたしだって彼らとそんなに変わりはない。これはバザーリアも言っていたことですが、人はみな、多かれ少なかれどこか狂っているところがあるわけなのですから。

こういった実践活動での体験を踏まえると、当初バザーリアが試みたアッセンブレアという試みの意義がいっそうあきらかになってくるような気がします。もちろん、彼の先見の明はそれだけにとどまりません。たとえば、彼は早い段階からReddito di Cittadinanzaを、すなわち、労働の多寡に限らずすべてのメンバーに一律に定額の金銭を支払うという、いまで言うところのベーシックインカムにも似た制度を導入しようとしていたことは驚くべき事実です。もちろんそこに至るまでにはいろいろな経緯があったと伝えられています。

あるとき、アッセンブレアのなかで患者たちが働いて得る賃金の問題が議題にあがり、従来の作業療法の枠組みとは異なったかたちで、患者たちそれぞれの活動を通してそれに見合う賃金を得るようなシステムに変える、という話になりました。しかし、じっさいのところ患者たちが自身の仕事に穴をあけるということがしばしば起きてくる。その穴の金額は日本円で80万円程度にまで嵩んでくる。そこでバザーリアはその穴埋めを自らの著作で得た執筆料等や賞金（バザーリアはその後にその自分の著作で、ビレッジョ賞というその文学の賞を受賞したとのこと）で補っていく。そして、ここからが大変興味深いところなのですが、その後のアッセンブレアのなかで、バザーリアが穴埋めをするだけの資金を準備できたのであるなら、そもそも労働の量や質に見合った賃金の支払いといった関係性に囚われなくてもよいのではないか、すなわち、マルクスが資本主義社会における搾取の問題として取り上げた労働／賃金の呪縛から

逃れて、何ら労働をせずとも組織の一構成員として積極的に評価し、すべてのものに対して一律にお金を支払うといった（ベーシックインカムのような）システムの導入を40年も先駆けて試みようとしたのです。アッセンブレアでの主体的でありつつ、また他者へのケアを重視する対等な対話をとおして、このような困難な社会的諸問題についても自分たち（だけ）で乗り越えていく。これもまた、広い意味でのソクラテスな哲学実践と言ってもいいようにすら感じられます。

先ほどからアッセンブレアでのルッキの発言を繰り返し取り上げていますが、このアッセンブレアにおける参加者たちはみんな「数年前まで死んでいた」存在、厳密に言えば社会から隔離され、監禁されていた存在だったことを思うと、バザーリアのこういった実践が患者の主体性を奪還しようとする驚異的な挑戦であったことがうかがえるのではないでしょうか。ちなみにフーコーは、監禁という事実および監禁された人間について哲学的な観点からいくつもの示唆的な考えを提供してくれた重要な哲学者ですが、そこからさらにわたしたちが心得ておかなければならないのは、監禁は人間を脱主体化された存在というものにまで貶めてしまうものでるからこそ、なによりも主体というものが(権利として)与えられることが望ましいと安易に捉えることを慎まなければならない、という点です。なぜなら、病人、患者という存在はつねに最初から（権利）主体として安らいで在ること、またその権利が単に与えられることが当人にとってもっともよい状態であるとは限らないからです。そこで、この点を踏まえてさらに考えていくと、ここにある種の逆説のようなもの（主体化を求めるが、単に他者から与えられるような主体性に安住しない。すなわち主体化は与えられるものではなく、さまざまな状況のなかで自分自身によって獲得されるべきもの。そのためには、つねに何らかのコンフリクトのなかを意図的に生きる必要がある）が生じてくることが見てとれます。そして、哲学的な実践のなかでわたしたちが目指していくべきものこそが、このような種々のコンフリクトをつねに生じさせ、その矛盾のなかを、さまざまな意見や考えを述べることをとおしてその当事者として生きることで、はじめて真の意味での主体性の奪還が果たされていく場を準備する、ということだと思うのです。主体は与えられるものではなく、獲得されるべきもの。だからこそ、あえてコンフリクトを顕在化させ、その矛盾のなかを逞しく生きることが重要になる。そして、この場と機会こそが、これまでわたしが言及してきたアッセンブレアの真の意義に他ならないのです。

アッセンブレアでは対話をとおして現実のなかにあるさまざまなコンフリクトを顕在化させることを一番大切にします。そして、そのコンフリクトを引き受け、そのうちで激しく意見を述べ合うことがなにより重要です。自分自身が置かれている現状に苛立つことなく、誰も何も言わない状態に安住する者は主体性をもっていない人に等しい。沈黙というのは必ずしも権力に抗っていることにはならない。安っぽい平和主義者ではなく、さまざまな矛盾を炙り出し、そのことについて激しく意見を述べ、話し合い、言い合っていくなかで各々が主体性を獲得していくことにつながっていく。すなわち、各々に自由な場があたえられたからといってすぐさまそれが平和ということではない、ということです。世の中には現実的に矛盾を抱えたような問題がいろい

ろと出てきます。地域のコミュニティーをかたちづくっていくうえで困難な問題がいろいろと出てくる。何もわたしたちは文学をやっているわけではない。やはり、具体的な経済を考える。組織維持のためのお金もつくっていかなければならない。抗争といえばよいのか、そういった現実社会におけるコンフリクトを顕在化させることで、それらに対して明確な疑いをもち、異議を訴えていくことになります。そこに、主体性が立ち上がってくるわけです。バザーリアはまさにそういった人で、抗争、コフリクトが何もなく、何も起こらないことが幸福なのかとつねに問い糺していました。話し合うことによっていろいろな意見が生まれ、反対意見も生まれ、それによって自分たちがそれぞれに成長し、主体性を取り戻していくということなのです。ただ、この点について少し補足しておくと、バザーリアは、これまで虐げられていたものたちに言葉を発する場と機会をつくったわけですが、じっさい、そこから出て自由の場に出た者たちがみんな幸福だったかというと、わたし個人としてはそれについて少し疑念をもっています。やはり、お金の問題にしても、どうしても解決困難なコンフリクトが現実の社会の中に残り続けることもまた真実だからです。とはいえ、バザーリアという人は、人々の心の芯から湧き上がるようなニーズがどういったものなのかについてつねに気を配る人物だったからこそ、ここまでの偉業を成し遂げることができたのだと思います。

またバザーリアは、他方で、この主体性を獲得する際に生じてくるある種の〈攻撃性〉[2]について、危機感を抱いていました。それは、社会において確かな役割を獲得していく際に必然的に生じてくる〈攻撃性〉のことです。誰もが社会のうちで何らかの役割を担って生きています。社会的な輪郭をもつという意味において、また他者から承認されるようにと社会にける自分の役割を獲得しようとする。そういった営みを誰もがするわけですが、そのプロセスにはたくさんの軋轢や不和が生じてこざるをえないと彼は言っています。簡単に言えば、キャリア形成を積みたいと考えている人たちのことを例にとるとよいのではないかと思います。出世したいと強く考えている人たちは必ず戦いますよね。他の人を蹴落としてまで上にいきたいといった感じで。これは何を意味するかというと、突き詰めていば自分の場をつくる、居場所をつくる、発言する場所をつくるということに他なりません。ですので、他者がいることで(他者の発言

[2] バザーリアは攻撃性の経験の必要性（la necessità dell’ esperienza dell’ aggressività）を理論化しました。というのも、彼にとって攻撃性は暴力に対する解毒剤（l’antidotoalla violenza）であり、精神病院は、彼にとっては暴力の具現化そのものであって、それは、ナチスの絶滅収容所での残酷な体験と同一視するほどものものだったからです。したがって、私たちが取り組まなければならない根本的なテーマは、たとえ哲学的な実践レベルにおいてであれ、私たちはこの攻撃性に恐れ慄くか、あるいはそれを信用するかにかかわらず、私たちすべてのうちにある攻撃性を顕在化することに政治的な価値があることをいちばんに示せるのでなければならない、という問題です。この攻撃性は、たいてい矛盾といったかたちで現れてくる、ある種の野蛮な状態といえます。しかし、そのことを隠し続ける限り、必然的に私たちは、それが他者に対して現れるか、自分自身に対して現れるかにせよ、それは何らかの暴力として私たちの前に立ちはだかります（a qualche forma di violenza）。そして、これは社会生活の一般法則のように私には思えます。例えば、市民に向かって強制的権力を行使する警察の介入は、誰も解決できなかった矛盾に対して挫折した状態（すなわち暴力）以外の何ものでもありません。抑圧的な政府は、対話を無視する行為者に過ぎません。

で)自分が阻害されるという状況が生まれるのであるなら、その他者を押しのけてまでも登り詰めていこうとするものです。これは当人にとっては自由を得るためのプロセス、解放のプロセスとも言えるものですが、その一方で攻撃性が伴われる(排他的な)プロセスでもあるわけです。そして、バザーリアはこのことにもつよい関心をもっていました。

通常、わたしたちは他者に対して自分自身を示し、その他者から何らかの承認を得ることで自由の身になる、主体性を獲得すると考えがちです。しかし、じつはその反対という場合も往々にしてありえます。すなわちそれは、他者を傷つける、他者を破壊するような行為を行うことで逆に自分自身を解放するということも当然起こり得るわけです。こういったことが起こるのは、先ほどお話したように、自分の社会的な役割、発言のための立ち位置を築くというプロセスに関係があることはあらためていうまでもありません。これは、何が起きているかというと、この役割のなかに主体性が閉じ込められてしまっている状態です。こういったことが起こると、主体であったものが逆に非主体的になっていく。そして、こういった社会的役割を獲得することによる非主体化のプロセスが(同時に)起こり得るということを、イタリアに限らず精神保健医療サービスのなかでは常に念頭に置いていくことが重要になるのです。

（アレッサンドロ・ディ・グラツィア）